資料１

富田林市文化芸術振興ビジョン策定委員会　第２回　議事録

日　　時	：令和４年１０月３１日（月）　14 時 00 分～16 時 00 分
開催場所	：富田林市きらめき創造館（Topic）３階　スタディルーム１
委　　員	：中脇（委員長）、中野、花柳、山本、飯田、金、岡、塩見、森下 ※敬称略
オブザーバー	：辻野、西村（以上、（公財）富田林市文化振興事業団）
事 務 局	：音羽、坂本、正木（以上、富田林市） 江藤、有田（以上、㈱地域計画建築研究所）
傍 聴 者	：４名

○会議次第

１．開会

事務局：（開会挨拶）

：（会議公開の説明）

：（配布資料の確認）

委員長：７月６日に第１回目の委員会を開催したが、主に参画と協働の必要性について議論した。また、地元の各種団体の方々がもっとこの場にいる必要があるのではないかとの話もした。それらを踏まえて、ヒアリングやアンケートを実施し、広く市民の方々の声を聞いたうえで、今後の富田林のビジョンを考えていこうとの方針であった。本日はその調査結果の報告を行いながら、どのようなビジョンにしていくかについて議論したい。

２．第１回策定委員会の振り返り

事務局：（資料１・２　説明）

委員長：以上の説明内容に対し、内容の過不足はないか。

各委員：意見なし。

委員長：第 1 回目の議事録と振り返りについては、承認していただけたとのことで承った。

３．各種調査結果の報告

（１）市民／小・中学生／保護者　意識調査

事務局：（資料３　説明）

委員長：アンケート結果について、質問や意見はあるか。量が多いため、各自の興味の中、もしくは主観的でもいいので意見をいただきたい。

委員　：アンケート集計の結果が全国的な集計結果と比較してどうなのかを知りたい。富田林の特徴があるのかどうかがわからない。あれば教えていただきたい。

事務局：比較できる対象としては、国が実施する文化に関する世論調査がそれにあたる。しかし、設問に関して、毎年変更するものもあれば、変更しないものもある。各自治体のこの手のアンケート調査は、公開しているものとしてないものがある。大抵の場合、文化振興ビジョンを策定する際には調査を実施することが多く、自治体でも自治体ごとに聞きたい設問があるため、設問を変える傾向があり、単純に他の調査と比較できないのが現状である。一番重要な設問である、文化芸術の鑑賞や活動に関しては、鑑賞では７割が見ていると回答しており、活動では３割が活動していると回答している。これらと富田林の調査結果を比較すると、過去５年間という条件は違うが、他の調査結果と比べ、非常に高いという印象を受けた。また、細かくは比較できていないが、全国的に見ても、歴史的建造物や文化財については特徴的に表れていると感じる。

委員　：アンケートの結果について、あまり驚きのある要素はない。

：子どもにアンケート取ったことはいいことであると思う。個人的には子供がいる回答者で文化の鑑賞や活動が多いことは普通であると思う。

事務局：アンケートでは因果関係までは分からないが、まずは調査結果の事実をそのまま記述している。

委員長：アンケート調査の結果は次の意見交換の骨子案の土台となるのではないかと思う。

（２）市長懇談会　開催結果

事務局：（資料４　説明）

委員長：市長懇談会では当事者からの目線で意見を抽出し、まとめてもらった。この件に関して、何か意見はないか。

各委員：意見なし。

委員長：では、これを調査報告とさせていただく。

４．骨子案の検討（意見交換）

事務局：（資料５　説明）

委員長：骨子案の内容はあくまで案であるので、報告された調査結果や懇談会等を踏まえて意見があればお願いしたい。ここは、順に意見を頂ければと思う。

委員　：私からは、市民調査について２点と将来像と方向性について１点、感じたことを述べる。まず、文化芸術を鑑賞しなかった理由について、子どものいる家庭で興味のある催しがなかったとの回答数が非常に多いと感じた。この点に関して、子育て支援と結び付けてはどうかと思った。例えば、「子どもの絵はどうやってみるの」「子どもの絵をほめてみよう」といったテーマで子育て支援の事業を主催し、子どもや保護者に参加してもらい、子どもには絵を描いてもらい、保護者には「子どもの絵はこういう観点から観れば、子どもの自己肯定感を高めることができる」

ということを学んでもらうセミナーを開催するのはどうか。このように、子育て支援と連携することで、文化芸術を鑑賞する機会が増えるのではないかと思った。

：もう１点が、文化芸術を鑑賞しない理由の回答で最も多かったのが「仕事」で４割を占めていること、また文化的に感じる時の回答で最も多かったのが「1 人でいる時」だったことについてである。この点を踏まえ、仕事をしている世帯も１人で行ってみたいと思える工夫が必要なのではないかと考えた。例えば、仕事をしている文化芸術鑑賞に興味がある独身男性でも行きやすいように、「誰とも出会わない」や「個別ブースがある」や「リモートで同時開催」などの工夫が必要なのではないか。このような取り組みがあれば文化芸術の鑑賞に結びつくのではないか。

：次に方向性について感じたことだが、将来像に関しては非常に良いと感じた。この方向性で行き、後は具体案を入れていけばいいのではないか。

：資料５の２ページ目、「そだてる」の内容で、基金を用いた活動助成について、これを「ふれる」、「つなげる」にも基金が行き渡るようにしてほしい。例えば、「ふれる」の中にアートスタート事業があり、「つなげる」の中に大学や企業との協働があるが、その部分にも活動助成が回るようにしてほしい。これが実現できれば、色々な事業が繋がっていくのではないかと思う。

：また、「そだてる」について勘違いを生む可能性があると感じた項目があった。それは、作家を育てる訳ではないということを共通の認識で持っている必要があるということである。あくまで、この項目での重要な目的は、個々の幸福度（ウェルビーイング）を向上させることである。作家を育てる訳ではなく、芸術教育や資源を育てることを共通理解として持っておきたい。

委員長：子育て支援は「ふれる」に該当するイメージなのか、それとも「そだてる」に該当するイメージなのかどちらか。

委員　：領域ごとで被る部分が多々あるので、一概に分けることは難しいと思っている。

委員長：課題点が幅広いので全て解決することは難しいと思う。１つの項目で複数の項目が該当するような工夫が必要であるという意見として解釈した。

委員　：芸術文化はウェルビーイングを高める力を持っていると思うが、国際交流協会の立場で意見を言うと、誰一人取り残さないという観点で、人権の部分でも文化は大きな力があると思っている。ビジョン内に人権に関する文言が入るかどうかは分からないが、本人が豊かになるという視点と様々な立場の人が豊かになる視点との両方が必要であるように感じる。

：例えば、外国人市民に対する情報の伝達方法についても課題であると思っている。聞く話によると、日本語が分からないので外国語でドラマを

見ているなど、日本にいながらも日本語に触れない状況である。その状況を踏まえて、色々な人に情報を発信できる視点を持ち、実際の施策として入れていただきたい。また、何かと何かを繋げるという視点は重要であり、先ほどの意見は良いと感じた。

委員長：ウェルビーイングという言葉は最近新しく社会に出てきた言葉でもあるが、個人の幸福度が他者にも広がるという意味で、なぜ「ウェルビーイング」を目指すのかをもう少し深堀したいという意見として解釈した。特に、国際交流の立場からアンケート調査の結果を見ると、「異文化共生」の割合（回答率）があまり多くはなかった。しかし、割合が低いからと言って優先順位を下げるのではなく、ウェルビーイングの中では重要なワードなので、入れるように配慮をお願いしたい。

委員　：私は身体障害者福祉協会の会長と校区福祉委員会の代表をしている。これらの活動は文化活動の活発化についても一躍を担っており、これらの活動を行っていくにもボランティアの活動が必要であるように思う。特に若者はボランティア活動に無関心であり、あまり参加してくれない。具体的には、身体障害者福祉協会が 70 周年を迎えているが、初期では 2000 人の会員がいた。今は 430 人程度に減ってしまっている。また、初期にいた 30 名の役員も 15 名程度に減っている。年長者の価値観や意見が古くなり、若者の意見と合わなくなってきている。そのような状況からも、若者の意見を取り入れていく必要があると認識している。そうしないと、若い方の意見が入ってこない。このような悩みの中でボランティア活動を活発化させるにはどうしたらいいのか。

委員長：高齢者の活動はあるが若い世代との交流が少ない現状がある。高齢化問題を抱えている団体の若者との世代交流を生む機会をつくることは課題の１つであると感じる。複数の「ふれる」、「つなげる」、「そだてる」に繋がっていけばいいと感じる。

委員　：本質的な話になるが、アンケートを見て、文化芸術に関心がない人が多い印象を得た。私自身はオーケストラをしていて、音楽の楽しみや喜びを、活動を通じて実感している。文化芸術に興味関心がなかった者の興味関心を引き出すのは難しい。アンケートの中では、興味関心を持たない理由に「きっかけがない」という回答者が多くいた。私自身、子育て時期はオーケストラから一旦離れてしまったが、子育てが終わるとまたオーケストラに戻った。根の部分で文化芸術に興味関心があれば戻ることができるがそうでない人はその余地がない。私が音楽に興味を持ったきっかけは、音楽を教えてくれる人がいたからである。今、自分の子どもに「どのクラブに入るのか」と聞いても、スポーツか文化かの２択の選択肢になっている。そうではなく、スポーツも文化も共通的な（同じ）位置づけではないかと思っている。子どもに対して、文化をすることの意味を教える場があるのかと言えばあるとは言い難いのではないか。極端な言い方になっているが、ビジョンに出ている案がどちら

かと言うと他動的であるように感じる。自主的に文化に興味を持つような施策が必要であると感じる。このビジョンで掲げている「ふれる」、「つなげる」、「そだてる」は少し高い目線で見ているように感じる。この観点も大切ではあるが、子ども達の文化芸術に関する根っこの部分にも焦点を当てて、施策を考えることも大切であると思う。この案を否定している訳ではない。

委員長：「ふれる」、「つなげる」、「そだてる」のサイクル図の外側の人を循環の中に巻き込むことが大切なのではないか。つまり、この循環図に案内する工夫がもう少しあった方がいいのではないかとの意見として解釈した。

委員　：若い人がこれからの日本を創っていくと思っているので、若者が自主的に文化の本質や文化の意味を考える機会を持っていただきたい。

委員長：サイクル図の構造についてリニューアルしていただくようにお願いしたい。

委員　：数量的な結果についても富田林市らしさが分かる色があった方が良かったのではないか。

：骨子の案については、膨大な量の取組みをどのように行っていくのかを考える必要がある。ずっと富田林市で生きてきた人間なので、この取組みを実施することの大変さが分かる。また、これらの取組みを実施できていれば、富田林市はもっと豊かな環境であるはずである。

：今、私は合唱をしているが、合唱をするきっかけになったのは、小学校５年生の時に音楽の授業で担任から「隣の学校に合唱団が来るから興味あったら行ってみて」と言われ、さらに姉にも「行ってみたら」と後押しされたことである。イベント当日、30 人いるクラスの中で 4 人の生徒が参加した。その後、その 4 人とは 2 年くらい一緒に合唱をしていた。私はそれ以来ずっと音楽を続けている。この経験で、いろいろな人と知り合う機会を得て、人生が豊かになったと実感している。僕がここに来た目的は、１人でも多くの富田林市市民が文化芸術に触れて欲しいからである。文化芸術との出会いで、「人生の潤いになっているな」と思ってもらいたい。ひいては、富田林で出会った人と繋がりができ、10 年 20 年後もその関わりを継続させることで人生を豊かにしてもらいたい。実際に、私が富田林を離れることができない理由は、長年付き合ってきた仲間の存在が大きい。先日の市長懇談会でも話していたが、学校の空き教室を貸してもらって何か文化芸術活動ができないのか。大人の活動を子どもが見える時にやった方が興味を持ってもらうきっかけにもなる。押しつけではなく、大人の背中を見せる方がいいのではないか。「子どものために」という考え方は重要ではあるが、大人が楽しんでいる姿を見せる方が効果的なのではないだろうか。

委員長：口コミがあれば参加しやすいという結果がアンケートにもあったが、誘い合える環境づくりというのは、先ほどの循環図の外側のネットワー

ク化にもいい影響を与えるのではないかと思う。「ふれる」、「つなげる」、「そだてる」の外側にある仕掛けや工夫にも焦点をあてる必要があるのではないかと感じた。

委員　：調査結果について２点気になったことがある。１点目は、文化芸術振興の在り方について、自由記入欄で「広報や活用」に関する意見が多々あり、情報収集の方法が足りていないのではないかと感じたことである。SNS の活用が足りていないのではないかと感じる。例えば、文化に関わるきっかけ作りやボランティアへの参加案内はもちろんだが、各文化団体が何をしているかが分からない。それを把握できるプラットフォームがあったら良いのではないかと感じた。また、このような取組みをすることで、文化芸術に関わるハードルが低くなるのではないかと感じた。

：２点目は、子どもが文化芸術に参加体験しない理由として、その他の内容に「恥ずかしいから」という記述があり、違和感を持った。他の委員が言っていたように、私も文化部と運動部の間に大きな溝があるように感じている。例えば、文化部の内容をカテゴライズせず、まずは文化全般という入口を設け、様々な文化芸術に触れてみて、興味の窓口を広げてみてはどうか。

委員長：若者には SNS での受信が効果的であること、文化活動に参加体験することへの「恥ずかしさ」を取っ払い、まずは文化芸術に触れることへのハードルを下げることを提案してもらった。

委員　：骨子案に書かれた将来像は理想である。骨子（の様な姿）にするのには長い年月が必要であるように思う。また、結果が実らず目立たない活動を続ける年が長くなると思う。

：私は学校現場（教育）に文化芸術を取り入れるために、学校に訴え続けてきたが、学校側も忙しいのでなかなか取組みが前に進まない状況である。しかし、このような状況であっても、学校教育の中で文化芸術を取り入れていくことは重要であるとの思いは変わらないので、外部講師を充実させるべきであると思う。教育委員会がこの現状を課題視し、学校側に対応するようにと言えば状況は変わるのに、そのような対応をしない教育委員会も問題であると思う。いつも話が教育委員会で止まってしまう。

：もう一点、花が咲くということは、しっかりと根が張っていることが条件であると思う。富田林市も歴史がしっかりしていなければ、実らないのではないか。よって、富田林市にも学者や学芸員を呼び込み、歴史資料館をつくるべきであり、１箇所に歴史的資料は集めるべきである。寺内町は富田林の１つに過ぎない。本来は富田林の歴史があってその中に寺内町があるべきである。この事情を市民にも知ってもらう必要があるのではないか。

委員長：資料館をつくる話はこの議論の論点から少し離れるかもしれないが、恐らく寺内町においては、観光だけでない活用方法を訴えているのだと解釈した。

委員　：観光だけで終わらせると文化の醸成が続かないのではないか。そこには歴史が必要なのではないか。

委員長：寺内町は観光資源にもなり得るが、それだけではなく、文化として育てていく必要があるという意見として理解した。

委員　：各委員の話を聞いていて、子育て等子どもに焦点が当たった話が多かったと思う。メインをどこにするかを決める必要があるように感じる。仮に、メインを「子育て」や「子どものアート」などにするのであれば、高齢者や国際交流の分野は見ないのかという問題になってくると思うが、共生できれば良いと思っている。例えば、学校に高齢者のアートティーチャーを招くなどである。

：公民館の活用に関する声も上がっていたが、公民館に若者が集う仕掛けを充実させることができれば良いと感じた。自分自身、学校から講師をお願いされたらぜひやってみたいと思うし、もし期待に沿えなくても紹介できる作家やアーティストはいる。このように思う人は多いのではないかと思うが、そもそもとしてそのような話（仕組み）が無いことは問題であるように思う。地域にいるアーティストが見えるように、アーティストバンクを設置するなど対応をしっかりできていれば良いと感じた。

委員長：何を重点施策にするのかといったメインを設定することが重要であるといった意見として理解した。アーティストバンクについては、もしかすると「文化芸術の活動をしている人のバンク」的な位置づけなのかもしれない。活動助成に加えられる要素なのではないかと解釈した。皆さまありがとうございました。各委員の立場から意見をもらったが、将来像における富田林ならではの循環図に、何をメインとしてやっていくのか、またこの循環に関心がない人と一旦離れてしまった人をどのように加えていくのかを意見として頂いた。人との繋がりや広がりを実感できるといったウェルビーイングの部分もこの循環図に含ませていくことができればいいと感じた。まとめ的に発言したが、これらの意見を議事録にも残し、骨子に反映させたいと思う。他に何か意見はないか。

委員　：委員会の立ち位置的な話で１点意見がある。我々の団体は毎年秋に文化祭を実施している。現在、団体の中には 13 の協会があり、合計で 350 万程度の予算が付いている。その予算について、数十年前は市の職員の中も、「あの団体は文化芸術を趣味として文化祭をやっているのに、そんなものにお金を出す必要があるのか」と文化に対して否定的な意見を持つ者もいた。今は市長の肝煎りの事業として文化芸術振興ビジョン策定にあたっているので、職員の中にそのような意見を持つ者はいないと思っているが、市民の中ではまだそのような意見は残っている。

今回、アンケート調査を行ったが、調査の実施についても否定的な意見を持っているかもしれない。しかし、このアンケート結果を読み取ると、子どもを持つ保護者の意見として、「子どもに生涯続けられる趣味を持ってもらいたい」という思いを感じ取ることができる。この思いを持ちながらも、実際にはそれをするお金がないという現状があり、その不満をアンケート内で曝け出しているように思う。アンケート調査を行った以上、今後そのアンケート結果で伺えた思いを実現できるように行動する必要があるのではないか。また、市民の意見に寄り添い、市民が一歩踏み出す後押しをするのが我々の責務なのではないか。

委員長：骨子に書かれた内容を支える何かがあることを指摘してもらった。その部分に関して本委員会で話す場ではないかもしれないが、どこかのタイミングで議論する必要はあると思っているので、それがいつできるか教えてもらいたい。一旦、以上で意見は区切りたいと思うがよいか。

委員　：すばるホールに関して２点ある。１つ目が設備についてであるが、現状壇上に上がる手段が階段のみで、車いすで上がることができない。そのため、階段をスロープにして車いすでも上がれるようにして欲しい。２つ目が食堂についてであるが、個人的に「食は文化である」と思っているので、皆さんにも共通認識として持ってもらい、すばるホールを充実させるという意味でも食堂を良い食堂に代えてもらいたい。今、食堂は全然使われていない。すばるホールの魅力の一つとして、食堂の在り方を考えていきたい。

５．今後について

（１）富田林ミューラルプロジェクトについて

事務局：（資料６　説明）

：中脇委員長との相談の結果、屋台を用いて市民の生の声をお聞きしたいと思っている。具体的には、イラスト等を載せた模造紙を用いて市民に文化芸術の興味や関心事を聞いたり、ウォールアートを楽しむ子ども達に、絵についてどのような印象を持ったか等の意見を集めたりしたいと思っている。

委員長：皆さんが想像している屋台とは少し違うかもしれないが、子ども達の集いの場を提供して意見を頂く取組みである。もし雰囲気等を実感されたい方がいれば、参加してもらいたい。

（２）平田オリザ氏講演会について

事務局：吉田市長が文化振興ビジョン策定のアドバイザーとしても活躍する平田オリザさんと縁があり、12 月 22 日に Topic で、ビジョン策定委員の皆さま及び市の職員と研修会を開くことが決まった。

（３）第３回策定委員会について

事務局：本日、骨子案に対して皆さんから意見を頂いたが、次回は素案（文章を記載した冊子）を検討していただく予定である。なお、12 月から 1 月頃にパブリックコメントを実施して第 4 回に続く予定である。皆さんへの報告を急ぐ。

以上